

## 平成 31 年度（令和元年度）星槎大学入学式式辞

星槎大学および大学院に入学された皆様、本日はおめでとうございます。

ご家族、ご関係者の皆様も、誠におめでとうございます。

また、ご多用の中、ご臨席いただきました皆様方、有難うございます。

星槎大学は共生科学部というユニークな名前の単一の学部・学科から成る通信制大学で、今年度は 1149 名の方が入学されました。その年齢層も 80 歳代から 20 歳未満の方々まで幅広く、社会人の方々も多く含まれております。また星槎大学院は教育学研究科と教育実践研究科から成り、今年度、教育学研究科には 29 名、教育実践研究科には 17 名が入学され、その方々の平均年齢は 40 歳以上です。

ですから今日入学された方々には、高校を出たばかりの方、すでに大学を出て社会で働きながら学ぶ方、他の大学で教えておられる方、行政などに関わりさらに知識を広げ深めたい方、退職されてから生きる意味と学びを深めたい方、子育てに悩みを持たれている方、何らかの事情で大学進学ができなかったけれども晴れて入学された方など、様々なバックグラウンドをお持ちの方々がいらっしゃるかと存じます。

さて、来月から元号が令和へと変わり、平成時代も今月で終わりを告げます。皆様の中には、昭和時代をよく知っておられる方も、平成時代しか知らない方もいらっしゃると思いますが、約 30 年間にわたった平成時代はどのような時代だったのでしょうか？ 少しそれを広い視野からふりかえってみましょう。平成時代は西暦 1989 年の 1 月 8 日に始まりました。その年の 11 月には、ほとんどの人が予想しなかったベルリンの壁が崩壊して、それまで続いていた冷戦時代があつという間に終焉し、ソビエト連邦も崩壊しました。

その時、これで国際的に平和な時代が訪れるだろうと思った人々も多かったと思います。しかし、その後の国際情勢に目をやれば、現実を決してそうではありませんでした。湾岸戦争に始まり、20 万人もの死者を出した旧ユーゴスラビアの内戦、そして 2001 年（平成 13 年）9 月 11 日にアメリカで起こった同時多発テロ事件とそれに続くアフガン戦争、イラク戦争、そして最近ではシリアでの内戦による大量の難民発生とそれをめぐる EU 諸国の混乱や、ブレグジットをめぐる英国の分断状況など、平和や共生とは真逆の出来事と情勢が続いています。

日本国内の平成時代の大きな出来事としては、昭和末期を賑わせたバブル経済の崩壊に始まり、平成 7 年の阪神・淡路大震災と地下鉄サリン事件、そして平成 23 年 3 月 11 日に起こった、2 万人近くの死者・行方不明者を出した東日本大震災と原発事故など暗いニュースが挙げられるでしょう。また、無視できない深刻な問題としては、子どものいじめの増大や高齢者の孤独死などがすぐに頭に浮かびます。

では、そうした時代の閉塞状況に風穴を開けるには、一体、どのようなビジョンが必要でしょうか。私は、それは人と人、人と自然、国と国が共生し合う「共生社会」というビジョンだと思います。星槎大学の母体である星槎グループは、人を認める、人を排除しない、その上で仲間を作るという三つの約束を理念に掲げていますが、星槎大学の共生科学部はそのような約束をさらに実践的かつ学問的に深めるための学問と言ってよいでしょう。

まず、人を認めるとは、多様な人間の在り方を承認し理解し合うことを意味します。次に、人を排除しないとは、子どもや様々な障害を抱えた方々を含むどのような人間も排除しないことを意味します。そして、仲間をつくるとは、この二つの理念を実社会で実践するための同志を集うことを意味すると言えるでしょう。

残念なことに、現在の社会は数多くの共生とは真逆の、差別、いじめや虐待、孤独死、人権弾圧、環境破壊、テロリズムなどに満ちており、そうした諸問題の現状を知り、その除去ないし克服がどのようにして可能かを、共に学び考えることこそが、共生科学の大きな課題です。したがって共生科学は、理念や目標を排除した価値中立的な科学でも、科学的考察を抜きにしたイデオロギーやユートピアでもありません。それは、冷静な現状認識を基に、共生社会の道を探りつつ、共生社会を妨げている現実の変革をめざす学問だと言ってよいと思います。

そして、そのような学問理念を強化すべく、星槎大学は今年度から新しいカリキュラムを打ち出し、教育、福祉、国際、スポーツ、環境の各分野で共生とは何だろうかを考える共生科学概説（１）と（２）を必修にいたしました。皆様は、教育の現場、福祉や医療の現場、自然環境の現場、スポーツの現場、国際社会の現場で豊富な経験をもつ先生方と、これからスクーリングなどを通じて共に学び、共に考える日々を送ることになるでしょう。

来年は東京オリンピックとパラリンピックが開かれ、星槎グループも何らかの形でそれに協力していますが、オリンピックはしばしば誤解されるような「国威発揚」のために行われるものではありません。それはオリンピックの父クーベルタンが企図したように「平和のための祭典」であり、スポーツを通して戦争の愚かさを自覚し、またオリンピック憲章が謳っているように、友情、連帯、フェアプレイの精神と国境を超えた相互理解を深めるため、言葉を換えれば、国と国との共生のみならず、人と人との共生を考えるための大きな出来事だと私は思っております。

星槎大学の星槎とは、色々なものを取り入れながら天空を目指して進む星の槎（いかに）を意味します。どうか皆様、共生社会の実現を目指して進む星の槎のような大学で、情熱的な先生方と共に学び、充実した大学生活、または大学院生活をお送りください。

平成31年4月13日  
星槎大学学長  
山脇直司